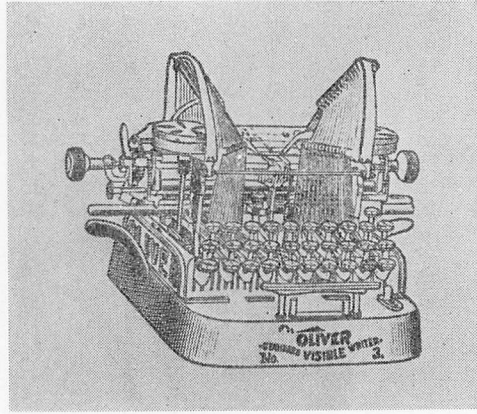


第六章 事務機械類の輸入

一 タイプライター

書籍、印刷、インキ等に深い関係を持つ事務用具にタイプライターがある。タイプライターは一名印字器といわれ、英文用がわが国に輸入されたのは、明治二十年代を最初とし、これを紹介したのは勿論丸善であった。当初のものはデンスモアタイプライター (Densmore Typewriter) で、続いてフランクリン (Franklin Typewriter)、ウェリントン^{#2} (Wellington Typewriter No. 2)、ブルンスウィク (Brunswick Typewriter)、ブリッケンデルファ (Blickenderfer Typewriter) 等があった。このウェリントンを何故第二号と名付けたかと云えば、ウェリントンとはかの有名な英国の大英雄の名前であり、遠慮して第一号とつけなかったからだと云う。英国人らしいユーモアである。次に四十年にはオリバー (Oliver Typewriter) が入荷した。これは非常に形が変っていて、鍵印字の柄に相当する部分は、印字盤の上部左右に垂直にとりつけられ、鍵^ヤをたたくと、印字の部分が四分の一回転して下降し、文字を印刻して行く。両側に山なりに弧を画いて直立する形は、宛然甲冑に似た観があり、全体の感じも堅牢に出来て居り、持ち運びするには左右に把手がつけられていて物々しい。それだけに他のタイプよりも目方が重い。元社員中村春太郎の話によると、初めこれを売りに来た外国人のセールスマンは、非常に背が高い男で、



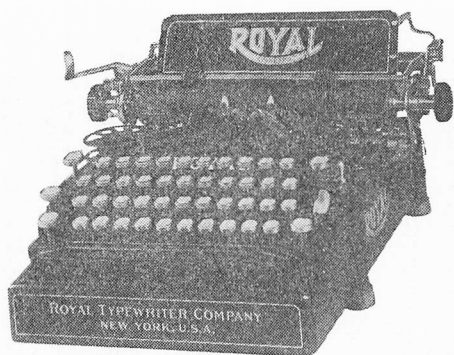
オリバータイプライター

それが片手で軽々と持ち上げるのでつい瞞^{だま}されてしまったが、さて売り込みに出かけようとすると、一個だけ担ぐのがやっとであったと云う。従って売込みに手を焼き徳島商業校がヤツと二台買ってくれただけで、この販売は止めてしまった。それ程に不体裁で重かった機械で、今はどこにも現物を見ることは出来ないだろう。

しかしその後丸善が販売に主力をそそいだものは近代的な機能と性能を持った米国製ローヤルタイプライター^{№5} (Royal Typewriter No. 5) であった。これは初め黒沢商会在、ローヤル社からわが国での販売について交渉を受けたが、同商会では先きにエルシースミスタイプライター会社と関係を持っていたため、特に親交ある丸善を以って代理店に推薦したので、大正三年四月、ローヤルタイプライター会社と販売に関する契約を結び、日本及満州の総代理店たる権利を獲得した。オリバーに比べると優雅な外觀は、女性美を具えている観があったから、一般の人気を博し、販売にも油がのったわけであった。今その広告文を見ると次の通りである。

◎他に比類を見ざる「ローヤルタイプライター」の特徴

(一) 操縦器は些の磨軋なき「ローラー」を具備し居れば、回転自在にして取扱も意の儘なり



ローヤルタイプライター No. 5

(一) 印字軸^{タイプル}は運動尤も迅速軽快にして殊に其材料を精撰せし鍊鉄に得たれば、地質強堅、圧力強甚にして永久

の使用に堪ゆ

(三) 印字軸^{タイプル}は最新式の直線型に則りたれば、指頭の軽打よく強大の圧力を生ずるは、「カーボン」紙を挿入して、一回優に十葉の鮮明なる印字を得るに徴して明かなるべく、到底従来^{タイプル}の曲線型印字軸の比敵する所に非ず。

(四) 微妙なる軽重機の備へありて過度の強打に接しても、反発するの憂なく、而も指鍵を毫も拘束せず。

(五) 字母の並列至つて整然、為に不規則なる印字を紙面に残すが如き事なく、従つて徒に枢軸を旋回して無用の修正を煩はすが如きことなし。

(六) 印字点は常に單一不動にして、周囲より交互四十二個の字頭を受けるが故に聊かも誤謬を生ずることなし。

(七) 架車の梓路^{トラップ}、操縦器の構造、聯関頗る巧妙を極め、其運動至つて円滑自在なり。

(八) 聯動式の梓路^{トラップ}と特殊なる球形の装置とは強靱なる縛帯の働きに伴つて架車の運動を安全ならしめ、延いて手際よき効果を奏せしむ。

(九) 無用の印字盤調整を全然削除して、構造の最簡最良を保せしは最

新式たる本「タイプライター」の誇りとするところなり。

(十) 凹字鐫ライニングは巧みに字母の先端を收容して毫も脱臼等の憂なし。

(四) 隔行位置至つて精緻を極め、順次に三行二行若しくは一行等注意の間隔を作り得べく、その間聊も錯誤を生ずる事なし。

(五) 指頭一触、翻転機を利用せば、印字用紙は容易に遊離して紙面に皺を生ずる如き事なく極めて好果を収め得べし。

(五) 紙端明示器の備へありて能く用紙の尽くるを予知するが故に、在来の「タイプライター」に於るが如く余白の有無多寡を顧慮して、印字の的確を誤るが如き事断じてなし。

(五) 「カード」用には別に煩はしき附属品を要せずして単に機の一部を利用して広き狭きを問はず自在の寸法に適用して「カード」荷札その他標札等レタールに印字するを得。

(五) 一個の字母は特殊指鍵の一捺によりて頭字、数字、記号等を自由に自在に印字し得べく、更に複雑の手段を要せず。

(六) 自働的特殊装置により、選ぶが儘に二色印字を行ひ得べきが故に至便此上なし。

(六) 従来の「タイプライター」に在りては字頭は往々塵埃油脂等に塗れ、為に字劃の不鮮明を來す事尠なしとせず、本機には特に「塵埃除け」の装置ありてさの欠缺を補へり。

(六) 勘定書その他大形の書類作成の際は特創の装置によりて用紙及び文句の増大に従つて左右に展開する事を

得べし。

(戊) 以上の如き数多の特徴を共有する低廉なる本機一箇を供へられよ優に従来の高価品数箇を凌ぎ得て、経済上大の利益を獲取せられむ事を俟たざるべし云々。

勿論このタイプライターの広告文は、「学燈」の毎号に載せられ、例えば大正四年一月号には

月桂樹の名誉ある葉の動揺はローヤルコシヤの合奏に共鳴す。新春の幸福はローヤル使用者の頭上に宿す。ローヤルは最善の勝利を制するビジネス戦場の大威力なれば也

と云う名文があるかと思えば、大正六年五月号には「一人のセールスマンが一月に販売したるローヤルタイプライターの数六十三台」と題し、そのセールスマンであるステッドマンをして、「此くの如きは全くローヤルの優秀が普くビジネス界に承認せらるる為にして如何に余が伎倆の最善を尽して努力するとも此の優良無比にして安全第一、敏活第一の機械ならずんば決して此の如き多数を販売する能はざる也」と云わしめている。

販売価格も、英・独・露・仏語共五号型で一九五円、型も機能も一段と改良され面目一新した十号型で二四〇円であったから、会社あたりではそう高い価格でもなく、一般家庭でも一機を具えておくことは左程無理ではなかったろう。しかし、丸善では更に一般家庭用に向けての普及をめざして、もっと手ごろな価格で携帯にも便利な、ポータブル機の良いものを物色していた。たまたまコロナポータブルタイプライター (Corona Portable Typewriter) のエージェントは東京のセールフレーザ社であったが、同社は良い販売組織を持っていなかったところから、その販売に関する一切の面を丸善へゆだねたため、同機の国内一手販売権を得ることが出来、これを機会に三〇〇台

の特価提供を発表した。大正十一年十一月号の「学鑑」に「コロナの使用は文化生活の最要件」と題し、

コロナタイプライターが新時代の文化生活を営む上にドレ文け著大な効率を発揮してゐるかは、既に久しい前から実務界及有識界に衆知の事実となつて居りますが、其の御使用者も現在では未だ社会の一部に限られ、

コロナの輕快敏活比類の無い器械的偉力が各方面に充分利用されて居ないのは誠に遺憾な次第でございます。其処で今度弊社では汎く皆様方に御使用を希望し且つは誰方にも手輕く御手に入ります様コロナ製造会社と協定の結果、新たに月賦販売を開始致しました。

と云う広告文を掲げ、英・独・仏・露いずれも一時払特価一〇〇円、月賦では一一五円で、毎月一〇円宛十一回払い、他に申込金五円をこれに加算し、申込みと同時にクロス製ケース付コロナ携帯用タイプライター一台を送ることにした。しかし、この申込みは直ちに定数に達したので、翌十二月号には『急告』として、コロナ特別提供を締切り、申込けのためローヤルの代換を月賦または特価で提供することを広告している。申込み殺到を予期しなかったとすればうれしい悲鳴をあげたことになるが、予めその結果を知つての策だとすればその商魂のたくましさは賞讃に価すると云わなければならないまい。

昭和になつて漢字制限、ヘボン式ローマ字、日本式ローマ字、カナ文字などの採用について論議が盛んになつて来たころ、丸善は逸早く米国のロトヤルタイプライター会社に命じてポータブルに片仮名をセットした「カナモジタイプライター」のポータブルをつくらせ、昭和四年五月には一三五円の価格でこれを売出した。またこの携帯用と共に事務用のものを三六五円で同時に発売した。前者はカナモジ会員の多くが使いはじめ、後者は三菱関係会社

ローヤル タイプライター ノ KANA-LATIN KEYBOARD フ、
コノ ヨウニ マゼカキ ヲ スルコトガ デキル ヘンリナ OFFICE-
TYPEWRITER デス。

カナ・ラテンタイプによる印字見本

などが率先して利用した。しかし肝腎のカナ文字問題の進展度から見て、時流に投ずるにはいささか早過ぎた嫌いがあった。但しローヤルにセットしたカナモジの字体は、カナモジ会の松坂忠則が工夫したもので、従来の一般活字には見られない特殊な字体で、各一字毎に変化を持たせながら総体的調和が計られていて、書きつづった文がたいへん読取りやすく、そして美しいものであった。その後しばらくおいて、事務用のローヤルタイプライターには、このカナモジとそれに調和するゴシック体のローマ字とを組合せたキーボードによる上記のような世界最初の「カナ・ラテンタイプライター」を発表した。

日本文の中に外国語をまじえる文章、あるいは外国語を土台にカナまじりでつづる記録などにその便利さが高く買われた。初期に於ては、医学、工学その他種々専門の仕事関係からの需要が多く、特に宮内省から二台（内一台は予備）の注文を受けたのは、天皇陛下の御料として生物学御研究の記録に使われたのではないかと思われる。その後時を追って、一般事務用・商業用としての普及度を高めてきた。次いで再度特別提供品として売り出されたのがローヤルシグネットタイプライター（Royal Signet Typewriter）で、英・独両文の二種類を一時払一六〇円 十五か月払一七〇円で販売した。これは従来の携帯用を更に改良し、重量五kg弱の大衆向スーパードータブルに仕立て、「通学に抱へる書物入の手提と大差ない重さで御子様方でも軽々御携帯が出来ます。シカモ操作の最中震動少く周囲の静寂を妨げませんから書齋に於ける

論文作製、勉強室内での語学の練習用として申し分ないのは当然な次第で」と、宣伝これつとめている。これを読んだ当時の専門学校、商業学校（旧制）以上の学生は、多分必死になって親達にせがんだことであろうし、せがまれた親達は定めし丸善を怨んだことであろう。過日関西地方の各支店を歴訪し、社史編集の資料を取材した時、京都支店での座談会で「近頃女学生の方々の間でタイブが流行しているのか、ポータブルがよく売れるのです」と云う話を聞き、「それじゃどうです。幸い丸善さんは家具や鏡台なども売っていらっしゃるのですから、これにタイプライターなどを加え、新しいお嫁入りセットをつくり売り出しては如何ですか」と戯談口をとばして大いに笑合ったものである。ところがこのローヤルシグネットタイプライターの広告に、

モダンな家庭のニューファーマニチュアとして汎ねく親しまれる携帯用最新小型

ローヤルシグネットタイプライター

とあるのを見て驚いた。良いことは誰でも同じように考えるものであるが、今から四十年前にこれを家具の一つとして取扱った広告の文案作成者に対し、今更ながら頭が下った。

タイプライターのことはこれ位にして、同工異曲の部に属する謄写機について一言触れておこう。

昭和五年新しくスタンダード輪転謄写機第五号が輸入されたのを機会に、丸善では翌六年に丸善製ロンド輪転謄写機五号を考案し、同年十二月八五円で売り出した。広告所載の印刷能力によると――

印刷面積 二五cm×四二cm

印刷速度 一分間七〇枚以上

原紙耐久力 原紙一枚付三、〇〇〇枚以上

指示コンパスの利用で二度刷三重刷可能

鉄筆・毛筆・タイプライターの使用可能

となっている。しかし勿論これのみでは満足しなかったから、更に改良工夫が講ぜられ、昭和八年には自働給紙装置及インキ自働補給装置付 Rond 輪転謄写機第十号が、更に昭和十二年には自働給紙型 Rond 輪転謄写機第六号が売り出された。

二 文房具の数々

モンロー計算機

「書く」「刷る」機械と共に事務用機として欠かすことの出来ないのが計算機である。丸善は、早くから各種の計算機を販売していたが、中でも最も力を入れたのはモンロー計算機である。大正七年に米国のモンロー計算機会社 (Monroe Calculating Machine Co.) との間に、日本及満洲に於ける総代理店契約を結んで販売を始めた。モンロー計算機は世界で最初のキーボード式 (ボタン操作式) 計算機として販売され、従来計算機といえばレバー式かまたは、ほんの二、三のスライド式が通念であっただけに競争の立場にある業者間にかかなりの驚異を与えた。モンロー計算機が最初

丸善へ輸入された時のモデルはG型（能力十六桁）六〇〇円で売出された。どんな計算でも、操作が簡単迅速で正確にこなすキーボード式モンローの性能は、到底これまでのレバー式計算機が及ぶところでないことはよく認められながらも、初めは価格の点でその販売の伸びが見られなかった。それがやがて大正の末期にモンローがK型に改良され（十二桁・十六桁・二十桁の三種）、昭和に入るとまもなくK型を電動式にしたKA型、KAS型（自動除算式）、KAA型（全自動式）等が相次いで現れ、これ等のモデルと前後して、更に殆んど無音に近い静けさで働くポータブルL型、またこれを電動式にしたLA型などがモンローラインに加わった。その頃から事務能率化問題が世上やかましくとりざたされるに及んで、計算機も価格より性能に重きを置いて選ぶうとする考え方が高まるに至り、以来逐年めざましい売行きの進展を示してきた。年によっては、計算機類の年間輸入総数の四〇％位までをモンローが占めたことすらあったほどで、ローヤルタイプライターとならんでモンロー計算機もまた、丸善の主要商品の一つとして挙げられる。

その他タイムスタンプ、鉛筆削器、数字打抜機などが逐次輸入されたが、ここでは記録の繁雑を避けるため一応表にして輸入の経過を示すに止めよう。

年	代	種	別	商	品	名	輸	入	先
大正二年	四年	計	算	機	ブルンスヴィガ計算機	ス	イ	ス	米
四年	計	算	機	マルディボ計算機	不				明
四年	鉛	筆	削	スチュアート自動鉛筆削	米				国

四 年	計 算 機	スタンダード顕出式加算作表機	米
六 年	計 算 機	ミリオネヤ計算機	ス イ
六 年	数字打抜機	ナショナル小切手数字打抜機	不 明
七 年	計 算 機	マーチャント計算機	米
七 年	計 算 機	ダルトン加算作表機	米
十年(?)	計 算 機	アイディアル計算機	(丸 善 製)
十 年	タイムスタンブ	ジョスリン製タイムスタンブ	米
十 一 年	計 算 機	アイデイトール懐中計算機	米
十 一 年	鉛 筆 削	シカゴ自動鉛筆削	米
十 一 年	鉛 筆 削	ダンデイ自動鉛筆削	米
十 一 年	鉛 筆 削	カステル自動鉛筆削	ド イ ッ 国

以上大正時代に取扱いを開始した主要な事務用機及び文房具について挙げておいたが、これを裏付けると共に、書き洩らしたその他のものを集録し、併せて初輸入の事務用品の売り込みが如何に苦勞を要したかを物語る証左として、元社員井筒静之助の手記から抜粋して見よう。井筒は明治三十七年入社後大正七年まで、凡そ十五年間、殆んど文具部に在勤したから、その道のベテランであり、手記は記憶によるものであると断っているが、正確且つその種類の豊富であるのに一驚を喫する。ここでは「新築社屋完成及びその後の頃」の項目の記事によることにする。

新社屋に移ってからの文房具には、どんなものがあつたであらうかと申しますと、従来の商品の外に、踵を接して新らしいものが続々輸入され又丸善製品として発売されたものが数多くありました。私の臚氣な記憶を辿って見ましても、次のように数え上げることが出来ます。器械類としては、ローヤルタイプライター第五号型次いで第十号型、ノイズレスタイプライター、ダルトン加算機、モンロー計算機、ロネオ輪転機、パンク手形保護器、シカゴ手形打拔器等。

万年筆としては、オリオン、オノト新種、ウォーターマン新種、(英) スワン、(独) ハーミット、ウォール等。

一般文具としては、アメリカンクレヨン、バステル、スチュバー製図用インキ各色、青写真用インキ各色、ボスターカラー各色、コイノアー製図用鉛筆等、プレスデル紙巻鉛筆、ゲハ軍用チョーク、時計型計算尺、ウィットマン製図器類、クリップレス紙綴器、シアシット紙綴器、アクメ紙綴器、鳩目パンチ、ピンカッターパンチ、ヒュッペのクリスタルインクスタンド、デラルー革製文具鞆類、ゾンネッケンの事務用文具等々。

丸善の特製品としてはアテナインキ、クラウンライテンパッド、新海竹太郎考案の趣味のオーク材書棚、夫婦机等。

多種多様に、かなり広い範囲に、商品の充実が見られるようになりました。

その他見本的に輸入研究されたものに、

米国ジエネラル・ファイヤー・ブルーフィング社のスチールキャビネット、独乙コンチネンタルタイプライ

ター、米国ノイズレスタイプライター、印刷機に取付けるナンバリング、独乙の絵具、歐洲もの上質洋紙などがありました。当時の日本はまだまだ、何事に依らず、残念ながら外国の文化には及ぶべくもない有様でしたから、丸善で輸入される文具は確かに新鮮であり、魅力的であったに相違ありません。材質に於いても、色彩に於いても、体裁に於いても、工夫考案に於いても、全く比較にならない程秀れたもの揃いであったと言っても過言ではないように存じます。一般から「丸善の文房具」と目され、早い遅いはあっても、それぞれ相当の売行を示したものでした。

然しながら当時の「丸善の文房具」の主流をなした大看板は何と云ってもタイプライターと万年筆でありましょう。無論タイプライターはローヤル、万年筆はオノト、オリオンで、どちらも特級商品でありましただけに丸善の力の入れようも並々ならぬものでありました。タイプライターにあつては、たしか大阪支店で活躍されて居られた間宮不二雄さんが本社に呼び戻され、タイプライター、計算機、回転番号機等の器械部門を専任開拓を命ぜられたのもその現われであると言えます。タイプライターは其の頃、銀座の黒沢商店ではエルシースミスを、米賀ではレミントン、ドットウエルではアンダーウッドを輸入、おのおのが専門に販路拡張に輪を競って居りました。時が時だけに、間宮さんの苦勞は一朝一夕ではなかつたようです。部下の吉野貞造さん、青柳道一さんを督し宣伝に販売に百方力を尽し、ローヤルの地位をグングンのし上らせたのも此頃からのことのようにです。(略)私はその頃、仕入関係の仕事が多く、余り販売方面にタッチしてなかつたのですが、たまには風の吹き廻わしで販売に引き出されることもありました。ダルトン加算機が入荷間もない頃、常陸の

日立鋁山に出張を命ぜられたことがありました。丸善から送ったサーキュラーに依り、ダルトンの使用法を求められたので、現品持参、助川駅から鋁山のトロッコに乗って鋁山事務所までゆき、売り込んだことがありました。ミリオネヤー計算機も一度、時の会計検査院総裁柳沢伯爵邸に伺い、算盤と競争させられたこともありました。(略)

金沢(末吉)重役は此の時分から万年筆の国産化を企図して居られたかのようです。と申しますのは当時商船学校の教授をして居られた並木良輔さん(後のパイロット万年筆の社長)の製作された金ペンに非常に興味を持たれ、ペン先に就いてしばしば面接し、色々とアドバイスして居られたかのようです。日本で金ペンが出来ること云うこと、鉄ペンでさえ輸入に依存して居った頃から確かに驚異で、私も時折り、金沢重役と並木さんの面接の席に侍りお話を聞いたのですが、本当に完全なものが出来るのかしらと思った位です。然し金ペンに北海道石狩産のイリジウムを採用し、難かしいとされたペン先へのイリジウム接着に成功した並木さんの自信は仲々のものでした。一方金沢重役は伊藤斉文具主任に命じ軸の研究をさせたようです。伊藤斉さんは神田鎌倉河岸の渡辺浩治氏に協力を求め、かずかずの試作を試みたようです。そのうち当時では誰も想像して居なかったアンバー色透明軸が誕生しました。これが「アルビオン」と名付けられたのです。